

# 海を越えた 農民オケ

## 上 幾多の障害

道内の農家らでつくる北海道農民管弦楽団は、農閑期を利用して1年に1度だけの演奏会を開くという、世界的にも珍しい形式の農民オーケストラ(通称・農民オケ)。総勢59人が2月中旬、北欧の農業国デンマ

ークで公演し、「大地からのシンフォニー」を響かせた。念願の海外初公演を実現させた原動力は、農業と音楽の両立を追い求める団員たちの情熱だった。(デンマークで西山由佳子写真も)

「参加者がこんなに減るなんて」。昨年春、公演の出欠を団員に確認した牧野時夫代表は言葉を失った。前年暮れに50人以上いた希望者が、半数以下に減っていた。オーボ

演(2月13日)も含めたデンマーク公演旅行は3連休を含む日程で調整。実現への機運が高まってきた中で希望者激減だった。理由は出欠確認の際に提示した30万〜40万円と

いう渡航費の高さにあった。団員の負担を減らすため、デンマーク公演実行委員長の金田勇・酪農学園大教授らが資金集めに奔走。ホテルのラ

り詰めも行い、渡航費は20万円前半まで下がった。それでも参加できない団員の楽器パートの穴を埋めたのは酪農学園大や北大などの学生14人。さらに団員があらゆるつ

てを使い勧誘。楽団初参加の約20人を含む59人が固まったのは出発2カ月前だった。

# 欧州公演支えた「応援団」

エやクラリネットは希望者ゼロ。オーケストラが成立しないう状態だった。

### 人数確保できず

「演奏を通してクラシック音楽の本場でアマチュア音楽家の活動に触れたい」と欧州公演を夢見るようになって10年。農閑期とはいえ、家畜を扱う農家などが長く留守にするのは容易ではない。団員には農業試験場などの勤め人も多く、欧州行きのハードルは高かった。公演話が持ち上がりても人数を確保できず、「挫折」(牧野代表)を繰り返していた。

そこで、現地の楽団との協



シルケボー室内楽団のメンバーを交え、リハーサルに熱が入る団員たち。2月12日、デンマーク・シルケ

### 楽器調達も難航

だが、問題は続いた。輸送費がかさむため現地で借りる、大型楽器の手配が難航。公演地のシルケボーだけでなく、100キロ近く離れた都市まで探した。「ティンパニーは公演前日に現物を見るまで、調達できたか分からな

一方で応援団も続々と現れた。道北の農業生産法人で働く永井守さん(34)は約10年ぶりに楽団に復帰。シルケボー近郊で農業研修をした経験を生かし、通訳などで活躍した。合同公演を行ったシルケボー室内楽団の木下澄代さん(61)は「長野県出身」も、現地の受け入れ態勢を全面的に準備。室蘭出身のラウセン君子さん(62)は、180キロ離れた自宅から駆けつけ、世話役を買って出た。

北海道農民管弦楽団 後志管内余市町の果樹農家、牧野時夫さん(48)が有機農業の研究仲間と1994年に設立。楽団員は約70人で、札幌近郊を中心に全道各地に散らばる。このうち農家は酪農、畑作、畜産などの20人ほどで、農業試験場の研究者や獣医師、農協職員、農学系大学の教員や学生らが演奏を支える。農閑期の10月末から約3カ月間、10日に1度の割合で道内各地から集まって練習を重ね、年1回の定期演奏会を開いている。

「幾多の困難に直面したが、皆で乗り越えてきたかいがあった」。演奏後、拍手に包まれた牧野代表は団員たちを笑顔で見つめた。